



矢島 落男 選

一茶忌や虚子も波郷も阿らず

越谷市 安居院半樹

【評】一茶忌に際して、一茶も虚子も波郷も時世や時の権力に追従しない俳人だったと思う。子規も龍太もそう。みな安易に妥協せず表現の世界を守った人たちだった。

七五三一番端の綿菓子屋

神奈川県 石原美枝子

【評】七五三帰らぬか。参道にはいろいろ屋台が出ている。懐かしい綿飴屋があるか親の世代は気になる。やと二番端っこに見つかった。霜焼や千人針を縫ひし日も

戸田市 小暮 よし

【評】霜焼けの手で今も縫物をしている九十代の方。昔、出征する人に千人針を縫った。生きて帰って、あの時も霜焼けしていたっけ。冬の河馬見ていてネンテンかと思はる

東京都 吉田かずや

報恩講悪人われも香あけて

大阪市 津田真砂子

水澄めりテトラボットに魚住めり

川崎市 久保田秀司

手袋に駄賃も入れて買ひ物へ

青梅市 松野 英昌

老ふたり蜜柑三つ目割くでなし

宇都宮市 松広 訓

つつがなく一日長し秋深し

奈良県 松井 秀仁

文化祭下手の横好きレベルでも

熊谷市 間中 昭

宇多喜代子 選

真つ直ぐに歩いて遠し大花野

調布市 浅野 文男

【評】すくそだた歩き始めて、意外に遠いことにガックリすることがある。花野を目標に歩き続けているのだが、まだまだのようだ。鷹の爪譲らぬ色となりけり

姫路市 難波 佳代

【評】よく熟れた鷹の爪はつやつやした深紅。畑にあるとき、もついか、もついか、と待ち、深紅がますます深くなつたのを見定めて腕ぐ。中七の表現が強い。

徳世の揺れて目の丈風の丈

吉川市 人見 正

【評】目の丈ほどの世がゆれていて。風にゆれている穂芒の様子をリズムカルに言いとめたところに面白みのある句。

深秋や竹人形に竹の冷え

佐野市 高橋すみ子

町医者臨時休業冬の雨

海老名市 岡部 福

後の月ものの影みな立たせけり

茨木市 木川 志佳

一輪車両手ひらひら秋の風

東大阪市 土屋 鉄男

大根を背中に背負う母の夢

千葉市 椿 良松

金木犀抱く赤子の大欠伸

東京都 斎木百合子

綿虫や松阪牛の市が立つ

津市 中山 道春

正木ゆう子 選

質問は渡り廊下で花ハツ手

所沢市 岡部 泉

【評】校舎と校舎を結ぶ渡り廊下で先生に質問をした記憶が、そういえば私にも。教室だとみんなが居る。職員室に行くのは気が引ける。渡り廊下はその中間。風通しの良い場所。ゆく秋や裾野ひろがる目玉焼

稲城市 新井 温子

【評】どこの山の裾野かと思えば、実は目玉焼。大景から突然フライパンに転じるスケール感が楽しい。目玉焼の広がりが具合は、朝毎の景。今朝の冬や海へ向かひけり

雲南市 熱田 俊月

【評】冬めいて、海からの風が冷たいけれど、今朝も海の方へと足が向く。海辺の人は海に、山が見えれば山に、人は自然に挨拶がしたいのだ。熊避けに大枝引き摺り音をたて

松戸市 稲葉 豊美

狐火や一本道のはずなの

京田辺市 加藤 草児

榎櫃の実落つるにまかす畑かな

町田市 枝沢 聖文

包丁をうすくうすくと無漬

唐津市 室井加代子

達磨市友となれそなピンク買う

東京都 田中 隆

釘衝へ槌での指図空つ風

川越市 大野宥之介

秋田発男鹿行鉄路しぐれけり

秋田市 進藤 利文

小澤 實 選

鉄板に押し付け鴨の肉こがす

神戸市 吉野 勝子

【評】鴨の肉を鉄板で焼いて、調理している。中七が「押し付け鴨の」、下五が「肉こがす」。句またがりになっている。鉄板に鴨肉を押し付けている、実感が伝わるのだ。

鯛焼の湯気抜の孔紙袋

土浦市 今泉 準一

【評】鯛焼を買ったら、入れてくれた紙袋に、湯気抜の穴が開けてあったというのだ。鯛焼のもっている熱量を、感じさせる仕掛けである。秋晴のキッチンカーのオムライス

武蔵野市 相坂 康

【評】野外のキッチンカーからオムライスを買って、その場で食べている。よく晴れた青空に、オムライスの黄色がよく映えるのだ。椋鳥の糞掃く日課寺の子は

羽曳野市 鎌田 武

焼餅を初めましたと電器店

吹田市 前田 尚夫

拾ひ来し馬刀葉椎の実立てて置く

神奈川県 大久保 武

どろろくや上司まさかの泣き上戸

島根県 重親 峯人

果樹園に残る轍や暮の秋

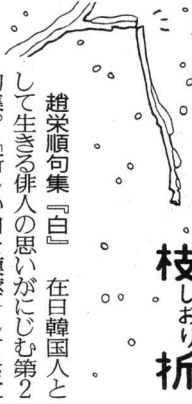
稲城市 山口 佳紀

どろろくを持たれよ黄泉は淋しかろ

茅ヶ崎市 清水 吞舟

どんぐりのほか見すとんぐりを拾ふ

大阪市 今井 文雄



趙栄順句集『白』 在日韓国人として生きる俳人の思いがにじむ第2句集。「新しい白を模索」してきたという気概があふれている。△桃すするふるさと持たぬ淋しさに▽

(青磁社、2750円)

福士りか歌集『大空のコントラスト』 青森で精力的に活動する歌人の第5歌集。目の前に雪国の静寂が広がる。△この雪はいつまで続く空深くコントラストの鈍き音する▽

(柘書房、2530円)

渡部泰明著『雲は美しいか 和歌と追想の力学』 万葉集以来、多くの和歌に詠み込まれてきた「雲」に焦点をあて、紀貫之をはじめとした歌人たちの発想や方法を探る。たちどころに変化し、消えていく、名脇役のような存在の雲に気がかされる。国文学研究資料館や国立公文書館が所蔵する蔵書の写真など豊富な図版を掲載し、読解を助けてくれる。

(平凡社、1100円)



題字デザイン・イラスト 福田美蘭